THE YONEYAMA UMEKICHI MEMORIAL HALL REPORT

米山梅吉記念館 館報

2010
（平成22年）
春
Vol. 15

ありがとう40年 さらなる一歩へ

財団法人 米山梅吉記念館

「米山文庫」復活

理事長　渡邊脩助

駿河の国最東部に位置する長泉町は、平成22年、町制施行50周年を迎えます。富士山の麓愛鷹山を望み、狩野川の支流である黄瀬川を流れる水は、4万人を数える人々の心をも潤しています。この長泉の地に米山が降り立ったのが、明治5年のことです。実父亡き後、実母の親戚を頼って来た梅吉も家族を、霊峰富士は深い情で受け入れたことでしょう。長泉で幼少期を過ごした梅吉にとって、この地の温かさがその人格形成に影響を与え、忘れ難い故郷になったのです。

お陰様で当館は、去る平成21年9月19日に創立40周年記念式典を執り行いました。遠く青森、兵庫や徳島からもご参会をいただき、懐かしい顔、新しい顔の200名を超える皆様とこの日を迎えられたことは、館を預かるものにとって何よりの喜びでありました。

振り返って見ると昭和44年(1969)、東海新幹線三島駅が開業し、東名高速も全線開通。アポロの月面着陸を放映するテレビに、人々の目は釘付けになりました。そんな時代に記念館は設立されたのです。長泉にあった米山の別邸保存運動に端を発した記念館建設は、先人のたゆみない苦労と努力の賜物であり、その歴史を受け継いで伝承していく役目を仰せつかっていることは、誠に光栄なことであると実感しております。

40年を祝ったその日から、新たな歴史を刻み始めた当館は、二つの課題を抱えております。まず第一に、公益法人への移行であります。これは法律改正に伴うものですが、井口常務が中心になり、定款の改訂が着々と進められ、移行申請の準備をしています。

次に、旧館の活用です。築40年を経た建物をなんとか有効再利用できないものかと協議を重ねた結果、「米山文庫」の復活が決定し、現在工事が進行中であります。米山は青少年健全育成に対して、殊の外情熱をもっていました。郷里長泉への思いも強く、昭和6年の「米山文庫」として結実します。「米山文庫」は米山が長泉小学校に寄附した図書館です。赤瓦屋根の鉄筋作り約15坪の建物は当時としては珍しいもので、蔵書約1000冊も米山の寄附によりました。学童だけでなく、村民も利用した「米山文庫」。ここで村民は、心の栄養を大いに養ったことでしょう。長泉小に残る「米山文庫」の由来には「当時、不況の波に人々が喘いでいたとき、この事業は氏の愛郷の精神の溢物であると共に、人々にとって明るい話題であった」と記されています。残念ながらこの文庫は、昭和59年に校舎の耐震工事に伴い解体消滅しました。

ここ数年の社会を見てみると、楽観できない状況が続き、時あたかも文庫設立の当時と同じ様相であります。そこで、再び「米山文庫」をというわけです。こんな時代だからこそ人々が集う場としての文庫復活。ここから生まれる人と地域との交流には、大きな意義があると思います。記念館創立40周年、長泉町町制施行50年、長泉ロータリークラブ創立25年という記念が重なったこともあり、三者が手を取り合い、この事業を推進しております。4月春の例祭時にはお披露目の予定です。予てからの懸案事項でありました記念館周辺の道路もいよいよ完成し、お越しの際の不便さも解消されます。オープンの際には、皆様にも実際に文庫をご覧いただき、「米山文庫」の心を感じていただければと思います。

平成21年11月、ながいずみ観光交流協会が長泉町ふるさとカルタを作りました。「奉仕する心を永久に梅吉翁」今後、この心を全国のロータリアンはもちろんのこと、地域の皆さんと共に守り、伝えて行きたいと思います。今後も、益々の叱咤激励をお願いいたします。

創立40周年記念式典

2009年9月19日、米山梅吉記念館創立40周年記念式典が開催されました。

式典には、記念館の地元2620地区はもちろんのこと、北は青森から南は徳島までのロータリアンやその関係者200人以上のご参会をいただきました。

記念講演のテーマが、伊豆を舞台にした内容とあって一般の方のご参加もあり、記念館は溢れんばかりの皆様と共に、40周年を祝うことができました。

当日、米山梅吉記念館功労者表彰が行われました。表彰された方々は次のとおりです。

米山記念館功労者表彰

敬称略順不同

◆米山梅吉賞

内藤成雄（第4代理事長）

◆米山梅吉記念館役員功労賞

伊藤文平（前常務理事）

◆米山梅吉記念館功労賞

●クラブ

2580地区	東京ロータリークラブ
2620地区	甲府南ロータリークラブ
2620地区	塩山ロータリークラブ
2620地区	静岡中央ロータリークラブ
2620地区	三島ロータリークラブ
2620地区	御殿場ロータリークラブ
2620地区	せせらぎ三島ロータリークラブ

●個人

福島ロータリークラブ	加藤義明
志木ロータリークラブ	浅田光二
横浜瀬谷ロータリークラブ	永野一好
有田ロータリークラブ(和歌山県)	成川守彦
静岡ロータリークラブ	伊藤恒道
沼津北ロータリークラブ	内田文義
沼津北ロータリークラブ	小林　俊
沼津北ロータリークラブ	井口賢明

記念講演

幕末の先覚者　江川坦庵

講師　迫田信行

幕藩体制を超える国家観をもっていた江川坦庵。名代官として民政に意を注ぐ一方で、鉄砲方兼帯、勘定吟味役格、海防掛など幕府の要職を次々に兼務しました。こんな多忙な中で、江戸、韮山を拠点に様々な情報や先進的技術を獲得し近代日本の礎を築いた。彼がなぜこのようなことができたのか、見てみたいと思います。

江川家は42代900年続く大和源氏の名家であります。初代は宇野朝親。大和宇野荘を本貫の地としていました。10代治信の時、源頼朝の旗挙げに加わり、その功績により江川の荘を賜ります。21代英信の時、姓を「宇野」から「江川」に改めます。26代英元が北条氏綱に仕え、その戦功により5000万石を拝領。備前守に任じられます。そしてこの時から通称として太郎左衛門を使い始めます。28代江川英長は、一族の中で唯一徳川家康に仕え、韮山城開城を実現しました。続く29、30、31代の時代に財政破綻をきたし、32代英勝は部下の不正を理由に代官職を罷免されますが、33代英彰が代官に復帰。35代坦庵の父・英毅は42年間代官職で政事に手腕を振るいます。38代英武は、兄の死にともない、わずか10才で家督を相続し最後の代官になります。

今日の主役、坦庵は、35代英毅の次男英龍として1801年に韮山屋敷で誕生します。12歳で江戸役所事蔵見習いになります。17歳の時、岡田十松の神道無念流「撃剣館」入門。岡田十松の撃剣館四天王の一人に数えられています。20歳の時、兄・英虎が亡くなったため、嫡子となります。23歳になると、代官見習いとなって、初めて11代将軍家斉に拝謁します。33歳で父・英毅逝去。翌年、家督を相続、韮山代官に就任します。父が長命であったため、家督を継いだのが比較的遅く、このときまで悠々自適の生活をしていたともいわれています。このとき家例にならって太郎左衛門を襲名します。

父・英毅は民治に力を尽くし、商品作物の栽培による増収などを目指した人物として知られていますが、英龍も施政の公正に勤め、二宮尊徳を招聘して農地の改良などを行ったり、郡内騒動の波及を阻止するため巡視をして、窮民救済のために尽力します。これが「世直し大明神」とよばれる由縁でもありましょう。

江戸時代で最も文化が爛熟したといわれる文化年間以降、日本近海に外国船がしばしば現れるようになります。幕府は基本的に日本近海から駆逐する方針を採っていました。江川としても、代官としての管轄区域には伊豆・相模沿岸の太平洋から江戸湾の入り口に当たる海防上重要な地域が含まれており、この問題に大きな関心と危機感を持ちます。こうした時期、36歳の坦庵は渡辺崋山・高野長英らを知ります。崋山らは、海防問題を改革する必要性を主張しました。当時、沿岸備砲は旧式ばかりで、砲術の技術も多くの藩では古来から伝わる和流砲術が古色蒼然として残るばかりであり、坦庵は彼らの中にあって積極的に知識を吸収します。そして、伊豆国警備策を建議し、農兵論を展開します。

坦庵は、幕府に提出した海防論の中で、何度も農兵制度の採用を上申しています。農兵とは、平時は農民として田畑の耕作に従事している者たちが、異国船来航などの非常時には、武器を持った兵士として活動することを可能にする制度です。坦庵が農兵採用を強く求めた背景には、幕府による海岸防備体制の不備がありました。

坦庵は、日頃から韮山代官領の農民に軍事的な訓練を施し、危急の際には農兵として動員して、迅速に海岸防備体制をとれるように、と考えたわけです。しかし、幕府の正式な制度としての農兵は、坦庵の在世中には実現しませんでした。たとえ一時的にでも、農民が武器を持つことを許可するというのは、兵農分離という原則を厳しく守ってきた幕府にとって、容易に受け入れられない要求だったからです。坦庵没後、韮山代官領以外の幕府領や諸藩でも、兵力増強のための農兵制度採用が相次ぎ、幕末期には全国的な拡がりを見せました。ただ、その訓練度の高さや装備の充実度においては、韮山代官領の農兵に勝るものはなかったといわれています。このことは、来るべき時代を見据えて早くから農兵制度実現への準備をしていた坦庵の、先見の明によるものといってよいでしょう。

40歳を過ぎると砲術師範になり、大砲小砲の製作を本格化させます。日本で初めてパンを作ったともいわれていますが、戦時の携帯食としてパンの製造を始めたのもこの頃です。48歳の時には、下田で、イギリスの艦隊マリナー号の退帆交渉に成功します。また、仕事で忙しい中、種痘の技術が伝わると、領民に接種をすすめ、自らの長子英敏、三女亜子にも種痘をうけさせます。50歳を過ぎてからは、品川沖お台場の築工に取り組みます。ペリー来航をきっかけに、江戸湾海防の実務責任者になった坦庵に対し、政府は台場築造と並行して反射炉の建設を許可します。当初、反射炉は下田に建設が進められていました。しかし、下田に入港していたペリー艦隊の水兵が、建設現場に進入するという事件がおきます。そこで、建設中の反射炉を下田から韮山に移転します。残念ながら坦庵は、この反射炉の竣工をみることなく55歳で亡くなりますが、子・英敏に引き継がれ完成します。

こんな坦庵に大きな影響を与えたのが、何と言っても父・英毅でしょう。英毅は、自身が有能な代官であり、同時に教養豊かな趣味人でもありました。坦庵には、幼少時から各方面の一流の師について学ばせます。また、坦庵も父の

明治42年当時の韮山反射炉

期待に応えて、何れの分野でも一流の域に達するほど学び尽くします。坦庵は、長崎留学を希望しましたが、旗本・天領代官ゆえに許可されませんでした。けれども、配下の若き英才達を、長崎海軍伝習所などに送り出します。また、オランダ語に堪能な配下には蘭書を翻訳させ、先進的な知識・情報を手にしていました。

そんな中で、渡辺崋山や高野長英らとの出会いは、より深く西洋事情を知り、西洋の進んだ軍事技術を導入することこそ、日本の海防にとって必要不可欠であるという思いを深くするきっかけになりました。崋山・長英等は蛮社の獄により失脚させられますが、坦庵はその遺志を継いで長崎に行き、近代砲術を学びます。「眠れる獅子」と恐れられていた清国がイギリスに完敗したアヘン戦争を知ると、長崎会所調役高島秋帆は幕府に「天保上書」を提出して西洋砲術採用を進言します。幕府は秋帆から大砲を買い上げ、かつ西洋砲術を旗本一名に伝授すること決定します。そして、その伝授を受ける人物として選ばれたのが、坦庵でした。以後、高島流砲術をさらに改良した西洋砲術の普及に努めて、全国の藩士にこれを教育しました。砲術の理論だけでなく、実地や訓練も行い、韮山では試射も行われています。そして坦庵は、自らの屋敷（現在の江川邸）を家塾として開放し、入門者たちに西洋砲術の技術を伝授しました。これが通称「韮山塾」とよばれていました。佐久間象山・大鳥圭介・柱小五郎（のちの木戸孝允）・井上馨・榎本武揚など、韮山塾（1842～55）や縄

武館から巣立った人材が、後に明治政府を支えていきます。

坦庵は、自分が得た知識を独り占めすることなく、次の世代を担う人材育成のために、惜しげもなく伝授していきます。このように、幕末から明治維新にかけて坦庵が果たした功績は、目に見えるものから見えないものまで幅広いものであり、その功績は偉大であったといえるでしょう。ジョン万次郎との出会いもありました。1853年、ペリーが浦賀に来港します。このとき万次郎は、坦庵の幕府への要請により、配下の手付けとなります。坦庵は万次郎から最新のアメリカの事情や、ペリー来航の意図を耳にします。これらの情報が、翌年の日米和親条約を幕府が決断する根拠になります。

さらに坦庵は、どん欲に様々な手段を用いてたくさんの情報を入手しただけでなく、これら情報を基に実現可能なプランを立て、実行に移す総合力ももちあわせていました。実際、国防を軸に富国強兵策を次々と実現させています。このような点で、薩摩藩の開明藩主島津斉彬に通じる点が多いですが、地方の一代官が成し遂げた業績としては驚異的といえます。

江川家には、酒造家としての一面もあったのでご紹介します。江川家は、遡ること大和・宇野荘を本拠としていた時代から、酒造に携わっていました。滋賀県守山市の宇野家はそのわかれで、今も蔵元「宇野本家」を名乗っています。韮山に土着してからは1250年、15代宇野英治が邸内の井戸水で酒を造り北条時頼に献上。以来、酒造家として世に知られるようになります。室町時代に一時廃れますが、23代江川英住の次子正秀が酒造法を研究し、北条早雲から「江川酒」の名を賜ります。江川酒の販路は結城から東にもおよび、客を接待する際に出す酒として、天野（河内国産）、菩提山（大和国産）と並んで「江川」が挙げられています。関東では三本の指に入る銘酒であったといえるでしょう。酒造家としての蓄財は、後北条の幕僚としての地位確保に、大いに貢献したといえます。信長、謙信、秀吉、家康なども「江川酒」を愛飲し、重用の酒として献上した際に、家紋からは「井桁菊」の家紋を拝領しています。家康の城下浜松でも売られ、大名の手紙に「本日、江川を賜り候」などという記述も残されています。しかし、5代将軍綱吉の「天領の代官たる者は職務に専念すべし」という厳命により、酒造家としての歴史は幕を閉じます。その結果、財政難に陥り、幕末には一千両の借財が生じることになります。

坦庵が、政治家として優れた民政官であり、着発弾、雷管銃の国産化、マリナー号退帆交渉や日米和親条約に締結など外交官として、韮山塾における教育者として、反射炉、お台場、パンの始祖などの先覚者として、また今ではお馴染みの「前へならえ」「右向け右」といった号令の発明、書画、詩文、作刀、焼き物などの趣味人として、剣客・砲術家としての面、さらには蘭学、経書、測量術なども学んだ博学多識の多才多能人間であったとことは、誰もが認めるところです。

「東洋のレオナルド・ダ・ヴィンチ」とも讃えられる多才、多芸なマルチ人間江川坦庵。米山梅吉さんもその著書『幕末西洋文化と沼津兵学校』の中で坦庵についてふれています。

「累代の善政と武勇を以てして家運の曾て衰へたることなく、天下の治亂興廃數なりし中に超然として常に旗幟の一國を形造り、嘉永年間太郎左衛門英龍に至りて最も異彩を放つた。英龍字は九淵坦庵と號し、その卓絶せる才能識見を以て幕末多事の秋に際して貢献せる所眞に少からざりき。」「天城山を源として韮山に沿ひ蛭小島を控へて流るる狩野川の水は、僅かに數里を出でずして沼津の海に注ぐのである。」米山さんも、坦庵という伊豆の郷土の先人の功績を大きく讃えて記し、そこに続く私達へのエールとしたのではないでしょうか。

米山梅吉記念館創立40周年記念式典に出席して

豊岡RC　麻　生　泰　成

此の度の記念式典に永年の念願でありました米山梅吉記念館を訪問させて頂きました。

ロータリーに入会を許されて35年になりますが、米山先生のことは、先輩の話や書物などから多少は存じておりましたが、米山先生人物写真帳を求めてから、一度は訪問したい思いを強くもっておりました。

新幹線三島駅から車を降りて、先ず目に入ったのは、写真で目にする六角堂の白亜の記念館でした。背後に富士の山を仰ぐ堂々としたたたずまえに、何故か目頭が熱くなる思いでした。よく知られた「いさかいもなき浸々の青田かな」の米山先生の碑、更にポール・ハリスの来日記念植樹（月桂樹二世）、旧記念館の全景をカメラに収めて足早に満席の新館式場に向かいました。

開会は、渡邊記念館理事長の挨拶で始まり、米山先生の言葉から「記念とは単に回顧ではなく、内省であり、また脱皮でもある。決して粗略に考えるべきではない」と申されていました。次いで、地元長泉町長、地区ガバナー、ＲＩ元理事の振興奨学会理事長、東京ロータリークラブ会長のご挨拶と続きました。式は厳粛な内にもロータリーならではのふくよかな雰囲気の中で進められました。

式典を終えて、早々に展示会場に向かいました。先ず、１階の理事長室では、親しまれた「山紫春色賢」の扁額の前で立ちすくんでしまいました。古語に「書は心画なり」とありますが、米山先生の内に蔵した卓越せる識見と高潔な人格が書に具現され、典雅でただ拝見しているだけで、心が澄んで洗われる思いでした。日頃から芸術の大きな目的は、自他の救済にある、と僭越に付度しております。「生きていてよかった」と謂う生の歓喜を奮い起こさせるエネルギーを自己の存在価値から他己に向かって放出しなければ意味はないと。

去り難い思いを断ち切って、一階して二階の展示場に向かいました。ここでも米山先生の書軸五幅が掲げられていました。その一幅が、なんと明の崔後渠の「六然」であり、勝海舟の座右の銘であったものを、米山先生が為め書きされたものでした。（自ら処すること超然、人に処すること藹然、有事の時には確然、無事には淡然、得意の時には泰然、失意の時には平然）これは私の好きな格言で、来館した二重の喜びを味わいました。

次に、お目当ての先生の書物の数々を見せて頂きました。『常識断門』は入会間もない頃から愛読とも耳読したく、絶版のためロータリー文庫でコピーを依頼して手元にあるのですが、実物はガラス越しのため手にすることはかなわぬことでした。次いで、写真でよく見る先生が米国で学位授与された時のガウンを始め、先生の遺徳を偲ぶ貴重品の数々の展示には、ゆっくり目をやる時間はなく、一旦は館外にて米山先生の墓地に向かいました。（我が国のガバナーは米国に行かれると大抵はポール・ハリスの墓前に行かれるように）先生の墓前では、我が国のロータリーの始祖である先生との邂逅に心からの感謝の念を捧げ、いま墓前にあることに全き胸の熱くなるのを覚えておりました。再び会場に戻り、美しい天井やロビーを眺めながら、一度ゆっくり説明を受けたい思いでした。

帰り際に、あのビチャイ・ラタクルＲＩ元会長が当記念館を訪問されたとお聞きして驚きました。かの大巨人を迎えるにあたって、地元ロータリアンの方々の筆々ならぬご尽力もさることながら、恐らく同じ東洋人同志であることもあって、かねてから米山先生を敬慕され、いかによく日本のロータリーを勉強されていた証左だと付度いたしました。

思えば小生入会後のある時期、優れたロータリアンになる径は、米山先生の人格をそのまま取り入れることだと教えて頂いたことが、今回の訪問でやっと胆の中に納まった思いでした。

列車の時刻も迫り、玄関に出て新旧記念館全景をカメラに収めました。何という調和のとれた気品に溢れた建物なのでしょうか。わが国のロータリーの躍進はここからだと胸を張っておりました。

優れた実業家で、歌人、俳人、漢詩人、書道家、教育者、政治家でもあり、国際的人格者として生き抜かれた米山先生のフィルターを通してロータリーを学べることの出来る私共は、至福の一語に尽きるのです。当記念館は米山先生を知るところであり、一度は米山詣でをしたいものです。そして、わが国独自の「米山月間」の実施にあたっても、先ず米山先生を知ることであり、先生の心と一つに出来るロータリアンを目指す月間とすべきだと誓っておりました。

米山梅吉をめぐる人々

～ 澤田半之助 ～

盟友・故澤田半之助君の一回忌に当たり、兄弟愛とも言える厚き友情と彼の風雲の人生・數々の業績について知り得た事々をご家族並びに門下生の方々に語り残す事が澤田兄への餞となれば幸いと思います。

彼の生い立ちは明治元年九月、福島県の要路、奥州街道の須賀川の有數の資産家・澤田本家喜兵衛の長男として生まれました。

当時澤田家は十家の分家が有り、名士を輩出している家柄で有ります。

祖は京都二条掉小路に発し、高家吉良家とゆかりがあると言います。元禄後期に江戸麻布材木町に住まいしましたが、元禄後期に士分を捨て福島に移住しました。氏は幼少の頃父と死別、かねてより本家の財産を伺う一部親類達の後見支配下におかれた為、向学の意思があるも寺子屋での勉学を余儀なくされ様々な迫害を受けましたがひるまず勉学に励み、成人して社会勉強の目的で仕立て職に奉公し、その間相愛の分家筋の姪と結婚、一女をもうけました。しかし、後見親類の策謀で離別させられる等のお家騒動に幻滅し、二十四歳の時、予てから尊敬していた親類であり自由民権学のリーダーでもあった渡米経験者の三浦篤次郎氏の活動に啓発され、海外に新境地を開くべく単身片道の船賃だけで百トンの貨物船で渡米、サンフランシスコ・ハドソン街に居を構え、日本人として初めての洋服屋を開業しました。

その地において持ち前の世話好きと友人愛と博愛心で留学生達（官費・私費問わず）の相談や、経済的な援助を個人で行いました。それが後年多くの友人知己を得る事に繋がったと思います。氏はよく「俺の財産は多くの良き友人達だ」と言っておりました。澤田兄の友人は留学生に留まらず、社会主義研究の徒、政治を志す人など多岐にわたっていました。その中の一人エール大学の学生（片山潜）の弱者労働者救済への情熱は彼の心を動かす処となり、氏との交友が後に日本で起こる労働者の権利を守る運動のきっかけとなった事は知られる事で有ります。

明治30年日本最初の社会史に残る職工義友会（後の職工期成会）の立ち上げに結びついたものと思います。

米国よりの帰国後の消息は多く知られていませんが、後藤新平公、児玉大将らの内命を受け、朝鮮李王朝の服飾改革指導の為に宮殿に派遣され、その時にかの「閔妃事件」に遭遇した様ですが、無事帰国し、銀座五丁目角に洋服店を開業、２頭立ての馬車に乗り、銀座の伊達者として評判を取ったりしました。

当時、岩谷天狗煙草が銀座を我が物顔で支配する勢いで数々の無礼を極めた行為が有り、当地の人々の顰蹙をかっていたことから煙草専売法の起案者村井吉兵衛と計り煙草専売法制定に持っていき岩谷天狗を駆逐した事は知る人ぞ知る事実です。氏の事業は多岐にわたり九州炭坑、岡山玉島（水島）の埋め立て、日露漁業、戸倉森林開発、箱根土地、軽井沢土地開発、大和毛織物等に関与した模様です。

公的な仕事としては後藤新平氏の要請で鉄道省の嘱託を拝命、被服工場設立を任されこれを達成しました。又、友人血脇氏のもとで勉学していた後の東京医科歯科大学初代校長奥村氏に息女を嫁がせ、血脇氏の書生であった野口英世

澤田の葬儀

博士が渡米の際、借金の為に渡米出来ない事情があったのを血脇氏を通じて弁済し、野口博士の渡米を可能にしました。

また、かねてよりの構想で有りました、日本の国際化と文明開化をもたらした米国に感謝の意を含め、親交と友情を暖める目的で「米友協会」を設立し、その事業の一環としてペルリ提督を顕彰するための記念碑をその上陸地に建てる事を企画、時の駐米大使珍田大将を通じ金子堅太郎子爵を会長に迎え、自身は常任監事として五名の秘書と事に当たりました。会は会員の援助支援もあって盛大に発展し、明治34年７月14日懸案の記念碑がペルリ上陸の地神奈川県久里浜村に完成し、会の最終目的を完遂した事はご存じのとおりです。後のこれまでの數々の業績に対し、時の秋山貴族局長より叙勲並びに授爵の通告を受けましたが氏は常に在野にあって一庶民として社会に尽くしたいとの信条からこのお申し出を辞退したことは称賛すべきことだと思います。

しかし、残念ながら大正７年長年の活動の過労が原因で病に倒れ、友人北里博士、血脇博士の診療を受けながら自宅で闘病生活を送られましたが、昨年ご家族に囲まれながら風雲の生涯を終えられたことは痛恨の極みで有りました。

ここに友人一同に成り代わりまして謹んでその波乱の一生の一端をお知らせすることが出来たことを光栄に思います。

昭和十年六月　米山梅吉

上記の文は、昭和９年に亡くなった澤田半之助の一周忌にあたり、米山が述べたものである。澤田と米山については、館報５号にも掲載されているが、澤田の葬儀は友人葬で行われており、葬儀委員長は米山が務めた。そして、一周忌にあらためて、友人として別れの言葉を捧げた。

同じ年に生まれ、若い頃を共にサンフランシスコで過ごした二人は意気投合し、帰国してから、そして澤田が亡くなった後までその関係が続いていく。

澤田の四男智夫氏によると、アメリカ時代澤田は、紙で作ったおもちゃを路上で売る米山の姿を目撃しているという。学費を稼ぐのに、大変な思いをして生活していたのだろう。澤田が渡米したのは24歳のとき、この時米山はすでにアメリカ生活が四年は経過していたはずであるから、アメリカ時代はずっと苦学していたのだろう。一方澤田は、渡米前に仕立屋に奉公していたので、すでにその技術を身につけていた。ハドソン街で日本人初の洋服店を開業し、新しい服を作るのはもちろん、アメリカ人の服をリフォームして日本人に安く売っていたという。

帰国した澤田が、銀座に洋服店を開店するときには、米山が援助している。この店は、番頭に引き継がれ、昭和20年に戦災でなくなるまで続いていた。澤田が育てた洋服の仕立て職人達は、澤田

銀座に開業した澤田洋服店

同門会建立の謝恩碑

会を結成した。この会は、半之助が音頭をとってできた会ではなく、半之助を慕った職人達が作った同門会である。このことからも、澤田の面倒見の良さをうかがい知ることができる。その後、同門会は澤田の墓所に謝恩碑も建立している。

澤田亡き後、米山は澤田家の財産後見人になった。澤田家は半之助の没後三十年は、富財で生活していたという。米山は、度々澤田家を訪れ、奥さんに対して「お金を使いすぎないように」とたしなめていたという。米山の妻はるも、直臨の妻と共に澤田家をよく訪れていたそうである。智夫氏によると、はる夫人は「上品で美人」だったという。

澤田と米山は、米友協会設立に尽力する。そしてその米友協会は、1901年、久里浜にペリー来航記念碑を作った。これには、ペリー来航により日本は近代化という新しいスタートを踏み出した。そして自分たちはアメリカという新しい世界を知り、そこで知己を得た。これはなんとも記念すべき事実である。そんな澤田たちの個人的な思い入れもあったのではないだろうか。1896年に米山が出版した、日本初のペリーの伝記『提督彼理』が、この年に再版発行されたことは、この記念碑建立と無関係ではないだろう。

澤田は資産家の家に生まれた。「人を助けるのが趣味」であったという澤田は、とにかくこの財産を人の為に使った。野口英世、片山潜など、自分が見込んで育入れした人の中には、後に有名になった人もいる。また、家の周りで重たい荷物に難儀している人をみれば手をさしのべ、物乞いにまで施し、と名も知き市民へもその目は向けられた。「友だちが財産、全て助け合う、証文はとらない、もし駄目になったらみんなで助ける」澤田のこの精神は、立場や思想を超えて実践されている。例えば、資産家の澤田と労働運動家の片山、一見すると相容れない立場にある。しかし、澤田の慈悲深い性格と、幼少期に受けた寺子屋の道徳教育が大きく影響を与えたことを考え合わせると、このつながりもうなずける、と智夫氏は語っている。また、裕福な出自でありながら、洋服店を経営した経験から、澤田は「働く」とはどういうことなのかを実感していたのだろう。だからこそ、これから日本でも起こるであろう労働問題に無関心ではいられなかったのでないか。サンフランシスコで高野房太郎、澤田等が作った職工義友会は、日本における近代労働組合の原点に立っている。

澤田半之助

澤田と米山の絆が、長くそして深く結ばれていたことは、世話好きである、情に篤い、しかも、利害関係なしの援助、そして見返りを求めないという二人の共通点であり、思想とその実行力をみれば当然のことであろう。

この執筆にあたりましては、澤田半之助の孫男智夫さんと智夫さんの朝倉利順氏に多大なるご協力をいただきました。

智夫さんは大正12年生まれ。昭和17年明治大学ご卒業。同時に電気化学工業に入社、平成元年に退社されています。

半之助が亡くなったとき、智夫さんは11歳。6人いたご兄弟もまだみな若く、当時は家族の中で父・半之助について語りあう、といったことはあまりなかったようです。生前の半之助も、自分の楽し方について自ら語ることはなかったのですが、幼年時代の話は直接聞いたことがあるそうです。半之助自身かなり怖い思いをしたようで、「馬の下に隠れて逃げた」こともあったそうです。智夫さんの推測によれば、兄玉大将の命により行ったということは、逆に政治的目的があったのではないか、ということでした。

貴重な情報を提供してくださったお二方に、この場を借りてお礼申し上げます。

ペリー記念碑前の智夫氏

米山梅吉翁ロビー展の開催について

中央三井信託銀行沼津支店

平素は格別の御高配を賜り厚く御礼申しあげます。

私ども中央三井信託銀行沼津支店は、昭和49年5月に旧中央信託銀行沼津支店として開設され、本年をもって開設36年目となります。静岡県東部地区唯一の信託銀行の拠点として、地域の皆様に支えられ、本日に至っております。

このたび、財団法人米山梅吉記念館様のご協力をいただき、中央三井信託銀行沼津支店1階ロビーにおきまして、旧三井信託銀行の創設者でもあります米山梅吉翁をご紹介する展示会（ロビー展）を開催させていただくこととなりました。

今回このロビー展を企画させていただきましたのは、米山翁がこの沼津に縁の深い方であることはもとより、私ども中央三井信託銀行の母体行の創設者であること、またその偉大な足跡について、私どもをご利用いただいているお客様、また地域の方々にご紹介したいと考えたからであります。また、今年は、米山翁が私どもの前身に当たる三井信託株式会社を大正13年3月に設立して86年目に当たりますが、現在の中央三井信託銀行が平成12年4月に三井信託銀行および中央信託銀行の合併により誕生して10年に当たる節目の年であることも記念して、開催することといたしたものです。

旧三井信託銀行としての最後の社史『三井信託銀行75年史』には、米山翁の弊社設立の経緯につき以下のとおり記述されています。『わが社の設立を中心となって推進したのは、当時、三井銀行の常務取締役を務めていた米山梅吉であった。米山は、同行在職中から海外における信託業務の発達状況に強い関心を抱き、わが国の経済発展と信託法制整備の状況から、わが国でも必ず信託業に対する要望が強まると確信し、基礎強固な信託会社を設立すべく準備を開始。大正12年8月、信託会社設立に専念すべく三井銀行を辞した。三井合名会社および同社の理事長團琢磨も、この信託会社設立の構想を了承して、これを後援することになった。その矢先の9月1日、関東大震災が発生し、経済界は未曾有の大混乱に陥り、信託会社設立計画は一頓挫をきたした。しかし米山は、震災により財産を失った悲惨な状況を目の当たりにして、財産管理を使命とする信託会社の必要性を改めて痛感し、信託業の将来に対する確信を一層深めた。大正13年3月25日、丸の内の日本工業倶楽部で創立総会を開催、ここに、三井合名直系会社の一つとして三井信託株式会社が成立した。』

その後、信託業法に基づく日本最初の信託会社として設立された三井信託株式会社は、昭和23年の銀行業務兼営後、昭和27年に三井信託銀行となり、平成12年の中央信託銀行との合併を経て、中央三井信託銀行として発足。さらに、平成14年の持株会社三井トラスト・ホールディングスの設立ならびに中央三井信託銀行および三井アセット信託銀行の完全子会社化等を経て、現在は中央三井トラスト・グループを形成するに至っております。

なお、中央三井トラスト・グループは、世界的な社会・経済構造の転換や国内における少子高齢化や経済の成熟化を踏まえ、お客様が抱える資産運用・管理に関する様々な課題を解決するため、今後、住友信託銀行グループとの経営統合を行い、高い専門性と総合力を併せ持った新しい信託銀行グループを創り上げていく予定です。（平成23年4月1日を目処に三井住友トラスト・ホールディングス（仮称）を新たな持株会社とする経営統合を行い、平成24年4月1日を目処に、統合持株会社傘下の住友信託銀行と中央三井信託銀行と中央三井アセット信託銀行を統合する予定です）

今回のロビー展では、米山翁が作成した「三井信託株式会社設立趣意書」を始め、米山翁と弊社の縁のある品を複数、財団法人米山梅吉記念館様、財団法人三井文庫様のご協力をいただき、展示させていただきます。皆様のご来店を心よりお待ち申しあげております。どうぞお気軽に足をお運びいただきますよう、よろしくお願いいたします。

〔中央三井信託銀行沼津支店「米山梅吉翁ロビー展」〕

○開催日時　平成22年3月1日（月）～3月19日（金）
（土日を除く、9時～15時）

○開催場所　中央三井信託銀行沼津支店
（沼津市大手町5-4-2沼津駅南口徒歩5分）

○問い合わせ先　☎055－962－3103

国際ロータリー第2620地区

ローターアクト第36回 地区年次大会開催

地区ローターアクト代表　水野弘迪

2010年1月30日・31日
ホテルアソシア静岡・米山梅吉記念館　にて

1月30日にホテルアソシア静岡にて、ローターアクト地区年次大会が開催されました。

当日は飯田ガバナーや益田ガバナー補佐、関部新世代委員長をはじめとし、多くのロータリアンの方々にもご出席いただきまして、誠にありがとうございました。

今年度のローターアクト地区大会は、ローターアクターの参加者が17名、ロータリアンの参加者が26名という小規模の開催となりました。ほんの5年前に同じく静岡北ＲＡＣのホストで行われた地区大会では100名を越える参加者がおりましたが、この数年で一気に規模が縮小してしまったと言わざるを得ません。

必然的に式典でのご挨拶やご祝辞では会員増強、クラブ数の増加を望む発言が多くなりました。

私自身も会員増強の話を挨拶の中でさせていただきました。本当は、地区のローターアクト代表という立場で、せっかくの地区大会ですから、もっと明るい話題で、集まっていただいた地区内のアクトの方々の、士気を向上させなくてはならなかったのだろうと思います。しかしながら第2620地区のローターアクトは低長に構えられる状況ではなく、緊急事態と言うべき状況です。

実際のところ、第2620地区のローターアクトは各クラブ内での会員数の減少に加え、クラブ数も減ってしまい、地区内に僅か5クラブとなってしまいました。5クラブでの活動となりますと、どうしても各クラブへの負担が大きくなりすぎてしまいます。ローターアクトにも、今回のような地区大会や地区協議会がありますし、アクトの日といった地区全体での奉仕活動も行っております。

2009年9月14日アクトの日の活動

ローターアクトの活動は各クラブごと、月に2回程度と多くありませんので、そういった地区行事のホストを務めることになると、半年近くは準備に時間を費やすことになります。

すると、打合せばかりの例会となってしまいますので、本来やりたい活動などはなかなかできなくなってしまいます。もちろん、式典の準備も各クラブの結束や個人の成長といった部分では大切な活動のひとつだとは思いますが、奉仕活動をしたくてローターアクトに入会した方などは、疑問を抱いてしまうかもしれません。

そのような状況から抜け出すためにも、最低でもあと2クラブは地区内にローターアクトクラブが新設されることが望まれます。

また、会員数につきましては「会員増強」と同時に「現会員の退会防止」ということも非常に大きな問題として、取り上げられました。ローターアクトはそもそも年齢制限がありますので、何もしなくても卒業という形で退会される会員がおります。しかしながら、入会して僅か1年2年で退会してしまう方もいらっしゃいます。これは、そもそもローターアクト活動の魅力や意義といったものを各クラブ内で見失ってしまっているのかもしれません。

そういった状況の中、式典の翌日は参加者の方々と米山梅吉記念館の見学をさせていただきました。

ローターアクトの地区大会と言うと、初日の式典の中で基調講演を取り入れるケースが多かったのですが、今年度は上記のような現状でもあったため、ロータリークラブの歴史や思想を学ぶことにより、ローターアクト活動を今一度見直してみようという考えに至り、講演を式典の中には組み込まず、2日間開催として、2日目に米山梅吉記念館を訪れるという形をとりました。

第2620地区のローターアクトの現メンバーは、ほとんどが入会してから3年に満たないので、誰も米山梅吉記念館を訪れたことがありませんでしたし、米山梅吉さんって誰だろうと思っていた方も多かったと思います。

当日は静岡市よりバスで米山梅吉記念館を訪問させていただき、まず初めに米山梅吉記念館委員長の三枝徳治様よりご講演をいただきまして、その後に館内を見学させていただきました。

ローターアクトの現メンバーにとっては本当に知らないことだらけだったと思いますが、非常にわかりやすく興味深いお話やご案内をしていただきまして、2時間にも満たない僅かな時間ではありましたが、今まで知ることのなかったロータリーの考えや起源に触れ、ローターアクトのメンバーも自分たちの活動により意味や自信を持てたのではないかと思います。ご協力くださった皆様、2日間ありがとうございました。

そして、常日頃より、私たちローターアクトに多大なるご支援をいただいているロータリアンの皆様、及び関係者の皆様、ローターアクト一同大変感謝をしております。誠にありがとうございます。

今後2～3年間が第2620地区ローターアクトにとって復興するか壊滅するかの分岐点となります。これまで、35年以上続いてきた第2620地区のローターアクトをここで終わらせるわけにはいきません。地区内、力をあわせて活動していきますので、今後ともご支援を賜りますようよろしくお願いいたします。

我輩はステッキである

我輩はステッキである。我輩の主人は、大正11年の生まれであるから、御年88歳。世間では立派な高齢者であるが、その辺の高齢者とはひと味もふた味も違う。小唄に三味線、若い頃からならした喉と腕は健在で、般若湯が入ればロは滑らか。私など、どれほど主人の役に立っているかはわからないが、外出の時には主人も私を頼りにしてくれる。

主人の家は、大阪・堺から数えると11代目。三島に住んで３代目。家康が関東に来るときに、振り落とされた商人の家である。三島、小田原にも支店があった。土狩の米山家とは、主人の先々代からのつきあいがあった。米山分家の人が、何人も主人の家の製紙工場に勤めていた。そんなつながりで、主人の尊父も米山さんとは懇意にしていて、三井で偉くなった米山さんの顔で、尊父は色々なことをやった。主人は子供の頃に、米山さんがアメリカから帰って来たときには、土狩村では花火があがった、と聞かされていた。

そうこうするうちに、米山さんから「よかったら、誰か青山にいれないか」と声が掛かり、主人に白羽の矢が立った。主人は当時、旧制韮山中学３年生。青山に転入することになった。学院の教師たちは、「田舎の小僧が入ってきたぞ」と主人のことをみていた。しかし、主人もただの小僧ではない。都会のお坊ちゃん達になめられまい、と張ガキぶりでアピールした。あまのじゃくの主人は、在籍中、早弁したり、ストライキをおこしたり、と自由に振る舞っていた。しかし、印籠のように米山さんの名前をだすことで助かったことが度々ある。

青山学院は２時間毎にアーメンのお祈りの時間があり、賛美歌を歌っていた。あるとき、主人は賛美歌のかわりに、大声で東京音頭を歌った。体操の先生に引っ張り出された。こんな事件はすぐに米山さんに伝わってしまうが、主人の保証人がその米山さん。お咎めなしで終わってしまった。もっとも、教員の中にも「米山さんのお陰で食事ができます」という人がけっこうあったそうだ。米山さんの恩恵をこうむっていたのは、主人だけではなかったようだ。

当時も成績表があり、主人は学期毎に青山南町の米山さんのところ見せにいっていた。その頃、米山さんの家の前には番小屋があり、お巡りさんが立っていた。主人は、最初の訪問時に、玄関から入って行った。すると米山夫人はるさんが出てきて「書生は玄関からはいるものじゃない」と一喝された。すると米山さんが出てきて「まあいい、まあいい。」と言った。それ以後主人は玄関から入れるようになった。学期毎に成績表を持って行ったが、米山さんは中身にはあまりふれずに「がんばれよ」と声をかけてくれた。

笹森順造氏

主人が青山学院を卒業するとき、東奥義塾の笹森順造氏が青山の学院長を務めていた。笹森氏は後に国務大臣になった人物だが、主人は、卒業記念にサインをねだった。今考えれば大した度胸である。近年、青山学院は、箱根駅伝でも好成績をあげている。近隣地区の校友会顧問を務める主人は、テレビ観戦にも熱がはいる。

主人は、学生時代に、米山さんに「ロータリークラブを手伝え」といわれ、青山学院の生徒何人かで、書類を作ったり、宛名書きなど、東京ロータリークラブの事務作業をしたことがある。手伝うにあたって、ロータリークラブについての話は、特に聞かされたことがないという。米山さんは難しいことは言わず、自分は自分で生きろ、という人だった。米山さんはバッチをひけらかすようなことはなかった。後に、主人の尊父は地元でクラブをつくる時、チャーターメンバーになり、初代、２代の会長を務めた。主人も現在、クラブの重鎮として、畏怖の念を抱かれている存在であることは間違いない。主人は自分の所属するロータリークラブが作った米山さんの年譜を、大事に保管している。自分が関わった年代には、しるしもつけてある。

昭和18年、学徒出陣で出征することになった主人は、米山さんのところに挨拶に行った。「俺も生きて帰ってはきませんが・・・」いつになく、殊勝な面持ちの主人に対し「馬鹿者、そら使ってもいいから生きて帰って来い。帰ってきたら、三井物産に入れてやるから、シンガポールでも行け。」と米山さんは声をかけた。

結局、主人は病気の為に、終戦を待たずに戦地の病院から帰ってきた。主人は今後の身の振り方について、三島の菱屋（現みしまプラザホテル）で米山さんと話をしていた。話の途中で空襲警報がなり、二人はあわてて避難した。主人は、入退院を繰りかえし体調が万全ではない米山さんを、抱えるようにして逃げたという。沼津の空襲のときである。

青山学院男子学生の教練

終戦後、主人に声をかけてきたのが、米山夫人のはるさんだった。米山さんも亡くなり、はるさん自身も寂しかったのだろう。そして夫人に紹介してもらって祝言をあげたのが、今の細君である。はる夫人は祝言にも出席。昭和22年11月11日のことである。昔は、招待客を分けて祝言に３日間くらいかけた。主人のことであるから、さぞかし賑やかな３日間だったことであろう。

昭和19年頃、米山さんが縣ヶ岡小学校の校長、奥さんが幼稚園の園長をやっていた。米山さんは、その小学校の生徒たちを、伊豆の落合楼に疎開させた。落合楼と青山とは、落合桜昔の先代が初等部の校歌を作詞したり、その子息が青山出身だったり、と縁が深い。昔からラグビー部や乗馬部など、学生達の行き来があった。

米山さんが亡くなったのは土狩の別荘である。

主人は、伏せっていた米山さんの枕元にも駆けつけている。米山さん亡き後、土狩の別荘は主人の尊父が管理していた。主人の尊父は、石橋満山に声をかけてここに住まわせ、三島大社で豆まきなどもやらせた。しかし、ほどなくしてこの地は分譲されてしまった。

夢幻のごとく、というけれど、88年間に主人は様々な経験をした。「90よりは先は余力だ」と宣うている主人であるが、あと２年どころか、まだしばらくは主人の外出につきあわされそうである。そういえば、主人の話に出てくる米山なる人物も、ステッキを愛用していたようだ。機会があれば、ぜひ、かのステッキ君と互いの主人談義など、かわしてみたいものである。

表紙の写真

①	②	③
④	⑤	⑥
⑦	⑧	⑨

①昭和20年頃の米山別邸入口
②昭和44年９月16日　米山記念館開館式
③完成した米山記念館
④昭和53年２月４日　梅吉生誕百拾年記念式典
⑤昭和58年９月16日　米山梅吉児童公園設置
⑥平成６年９月17日　米山梅吉記念館開館25周年記念式典
⑦平成10年４月28日　新米山梅吉記念館落成
⑧平成14年11月27日　RI会長ビチャイ・ラタクル氏来館
⑨平成16年９月18日　米山梅吉記念館開館35周年記念式典

中央三井トラスト・グループ
中央三井信託銀行

あたらしい、あなたらしい将来設計へ。

ご家族やご自身の「これから」のために、
中央三井では、信託銀行ならではの
多彩な商品とサービスで
皆様のお手伝いをさせていただきます。

資金運用

●お客様の資金の性格にあった
豊富な運用プランのご提案

ローン

●住宅ローンに関するご相談
●二世帯住宅ローンに関するご相談
●借換えに関するご相談

遺言・相続

●相続対策のご相談
●遺言書作成・保管のご相談
●遺産相続手続きのご相談

不動産

●売却のご相談
●購入のご相談
●買い替え・住み替えのご相談
●不動産の有効活用 など

中央三井信託銀行 沼津支店 〒410-0801 沼津市大手町5丁目4番2号 TEL.055-962-3103

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後4時

休 館 日

●月曜日
●12月28日～1月4日
●整理のための休館日
（5月・8月の特定日）

米山梅吉記念館 館報
Vol. 15

発行日 平成22年3月10日
発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊傳助
〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
URL : http://yoneyama-umekichi.jp/
e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp
印 刷 フタバ印刷株式会社